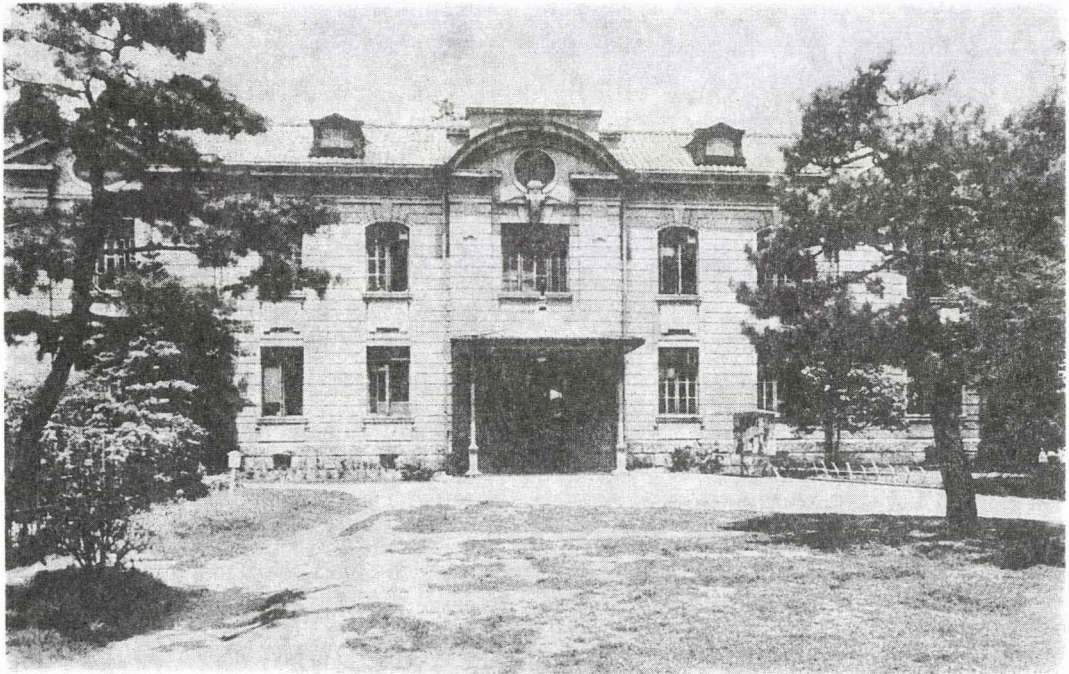


京大広報

No. 437

京都大学広報委員会



文学部陳列館（現文学部博物館旧館）

—関連記事本文 448 ページ—

目次

〈栄誉〉	日誌	450
三枝武夫名誉教授が紫綬褒章を受章	448	
〈紹介〉	〈随想〉	
文学部史学科	特攻機「桜花」の思い出	
448	名誉教授 菊地 泰次	451
能楽鑑賞会の開催	449	
計報	449	
	〈コラム〉	
	フランス歌曲と歌舞伎	
	教育学部教授 三好 暁光	452

〈栄誉〉

三枝武夫名誉教授が紫綬褒章を受章

三枝武夫名誉教授（元工学部教授，重合化学）に、わが国学術の向上発展のため顕著な功績を挙げたことにより、平成4年11月3日紫綬褒章が授与された。

〈紹介〉

文学部史学科

京都大学の史学科は1907年（明治40年）、哲学科に続いて京都帝国大学文科大学の二番目の学科として開設された。発足時には、国史学、東洋史学、史学地理学第1（現西洋史学第1）、同第2（現地理学）の4講座をもつにすぎなかったが、翌年から翌々年にかけて東洋史学第2、第3、国史学第2、史学地理学第3（現西洋史学第2）の各講座が増設され、さらに1916年（大正5年）にはわが国で最初の考古学講座が開設されて、計9講座を数えるようになった。その後史学科では久しく新講座の開設を見ることがなかったが、その間、当学科に属する各専攻は1963年まで、いずれも陳列館（現在の文学部博物館の旧館部分）に研究室を置き、たがいに学問的交流を重ねながら、独自の学風を形成していったのである。

1966年（昭和41年）にいたって新しく現代史学講座が、続いて1969年には西南アジア史学講座が開設された。その後1989年（平成元年）には地域環境学講座の新設を見たが、本年4月文化行動学科の発足に伴い、同講座は地理学講座とともに史学科より分かれて新学科に所属することになった。こうして現在の史学科は、10講座6専攻（大学院では6専攻分科）からなり、学生数は学部（3回生以上）が164名、大学院修士課程47名（うち外国人留学生5名）、博士後期課程45名（うち留学生10名）であり、ほかに研修員・研究生として35名（うち留学生13名）が在籍している（本年10月現在）。

京都大学史学科の特色としてまずあげるべきは、国史、東洋史、西洋史という伝統的地域区分による3専攻と考古学講座（専攻）のほかに、現

代史学、西南アジア史学の両講座（専攻）をもつことである。現代史学講座は、20世紀、とりわけ第1次大戦以後の世界史を研究対象とするが、様々な地域で生起する事象をつとめて世界史的関連の中で考究しようとするところにその独自性をもつ。また西南アジア史学講座は、西アジア・中央アジアの歴史と文化の研究・教育を推進すべく設置されたもので、イスラム時代史、オリエント史を中心領域とする、全国的にもユニークな講座として注目されている。なお、同講座の研究活動と深い関連をもつ施設として、内陸アジア研究施設（羽田記念館）があることに触れておきたい。

京都大学史学科のいまひとつの特色としては、創設以来その中に地理学講座（専攻）を含み、歴史の研究と地理学のそれとが密接な連携のもとに行われてきたという点をあげることができよう。前述のように地理学講座は史学科から分離したが、歴史研究にとって地理学との交流の重要性は今後も変わることがないであろう。

国際交流の活発化は大学全体の趨勢であるが、史学科の場合もその例外ではなく、東アジア諸国を中心に、外国からの留学生は年々急増している。また招聘学者や共同研究者として史学科を訪れる外国人研究者も増加の傾向にある。さらに昨年5月には東洋史、西南アジア史、言語学などの研究室が中心となって、文学部と内陸アジア研究施設との共催で日中合同契丹文字研究国際シンポジウムが開催されたことを記しておきたい。

総合への強い志向をもつ歴史学においても、研究の専門化、細分化は進む一方であるが、そうした中で新鮮な歴史像や歴史解釈を打ち出すためには、従来の日本・東洋・西洋の地域区分にとらわれない広い視野からの考察が要請されると同時に、隣接の諸科学の動向に絶えず目を向け、その成果を歴史研究に積極的に導入していくことがますます必要になっているのではなからうか。また、世界各地で日々生み出される膨大な量の研究成果や新たに発見された資料を遺漏なく利用するためには、それらに関する情報の蒐集と処理の面でも新しいシステムの確立が急務となっている。このような研究状況の変化によって、創設以来85年を経た京都大学史学科も、新しい曲り角にさしかかっているように思われる。（文学部）

能楽鑑賞会の開催

平成4年度能楽鑑賞会を下記のとおり開催します。本学教職員・学生の来場を歓迎します。

記

日時 平成4年12月10日(木)午後6時半開演
 会場 京都親世会館
 京都市左京区岡崎円勝寺町44
 (東山仁王門を東へ約300メートル)
 演目 狂言 「貰^{もらい} 簀^{むす}」 茂山 正義, 茂山千五郎 他
 能 「隅^{すみ} 田^{たがわ}川」 片山九郎右衛門, 河村 和晃, 福王茂十郎 他

入場無料

備考: 職員証又は学生証等を持参してください。定員は550名先着順とします。

(学生部)

計報

松下 進 名誉教授

本学名誉教授 松下 進先生は10月20日逝去された。享年89。

先生は、大正15年3月京都帝国大学理学部を卒業後、旅順工科大学助教授、昭和6年京都帝国大学助教授を経て、同17年5月京都帝国大学教授に就任、同41年3月退官された。

本学退官後は、昭和44年4月奈良大学教授に就任、同53年3月に退職された。その間、同45年11月～同47年10月、同50年2月～同51年5月の2度にわたり、同大学学長代行を務められた。京都大学及び奈良大学名誉教授。

先生は、永年にわたって学生の教育と後進の指導ならびに大学の運営に尽され、また、地下資源開発審議会委員、鉱業審議会委員、学術研究会議会員、地質学研究委員会委員、日本地質学会評議員、京都府文化財調査委員などを歴任された。

先生の専門は、地史学、構造地質学上の基礎的

研究であった。とくに、詳細にして正確な野外調査に基づく、中国大陸及び朝鮮半島の先カンブリア界の層序と地質構造の解析、カラコラム・ヒンズークン地域の地質学的研究や、近畿地方の地史学的及び構造地質学的研究とその総括などは、アジアの地質構造発達史の解明にとって大きな貢献であっただけでなく、その着実な研究の学風は門下生や後進に大きな影響を与えた。

また、先生は地質学の立場から炭田開発の基礎的調査、研究を指導された。

主な著書として、『Studies on the Geologic Structure of the Phyangyang Coal Field, Korea』、『Geological Research in the Western Karakoram』、『日本地方地質誌 近畿地方』などがある。

これらの学術上の貢献と社会的貢献により、昭和48年に勲二等瑞宝章を授与された。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

(理学部)

大西 信一 理学部専門職員

理学部専門職員 大西信一氏は、10月25日逝去された。享年58。

同氏は昭和29年本学学生部厚生課に就職され、以後、教養部厚生掛長、農学部第二教務掛長、農学部第一教務掛長、厚生課生活掛長、厚生課学資掛長、入試課入学試験掛長、入試課入試掛長、医学部教務掛長、理学部専門職員を歴任、この間約38年余りの永きにわたり、大学行政、なかでも教務事務に大いに貢献された。

昭和59年には京都大学永年勤続者表彰（30年勤続）を受けられた。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

（理学部）

上田 恭治 名誉教授

本学名誉教授 上田恭治先生は、10月27日逝去された。享年74。

先生は、昭和18年京都帝国大学文学部を卒業後、同大学文学部副手、同22年第三高等学校講

師、同23年教授を経て、同25年京都大学分校（教養部）助教授、同38年教授に昇任、同56年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。

先生の専門は哲学と論理学で、論理学の分野では、戦後の我が国においていち早く記号論理学を導入して『論理学』を、また、近代科学哲学の研究成果として『ペーコン』を著わされた。科学哲学上の先駆的な業績としては、ホワイトヘッドの研究がある。このような業績を通じて日本の論理学・科学哲学の発展に大きな刺激を与えられた。さらに、西田哲学のもつ弁証法的論理をヘーゲル研究を介して深化させると共に、弁証法論理と分析論理との統合という画期的な試みによって、哲学に独特な問題領域を開拓された。こうした論理学・科学哲学の研究と同時に、禅の体験を通じて、東西の自然観の問題点を提起し、東西思想の媒介のために貢献された。

先生は、本学において32年余にわたり、教養部及び文学部の哲学・論理学を担当され、多くの優れた人材を育成された。これらの功績により平成3年には勲三等旭日中綬章を授与された。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

（総合人間学部）

日 誌

（1992年10月1日～10月31日）

- | | | |
|-------|--|---|
| 10月1日 | 連合王国オックスフォード大学 Baruch Samuel Blumberg ベリオル・カレッジ学長他1名来学、総長と懇談 | 後、21日、28日、11月4日、11日) |
| 6日 | 大学院審議会 | 20日 評議会 |
| 8日 | スウェーデン王国 Odd Eiken 教育省次官他1名来学、総長と懇談 | ク オーストラリア メルボルン大学 David G. Penington 副学長他3名来学、総長と懇談 |
| 12日 | 京都大学春秋講義 月曜講義 第1日目（以後、19日、26日、11月2日、9日） | 21日 国際交流委員会 |
| ク | オーストラリア クイーンズランド工科大学 Nell Arnold 校長他5名来学、総長及び関係教官と懇談 | ク 国際交流会館委員会 |
| 14日 | 京都大学春秋講義 水曜講義 第1日目（以 | 23日 環境保全委員会 |
| | | 24日 京都大学市民講座「かたち」第1日目（以後、31日、11月7日） |
| | | 29日 中華人民共和国 清華大学 張 孝文 校長他4名来学、総長及び関係教官と懇談 |

